

# もみぐら 粃蔵

飢饉きぎんに備えて、粃（脱穀していない米）や雑穀類、干した田螺たにし（淡水に住む巻貝・貴重なタンパク源となる）などを蓄えていた蔵。

高梨家の家訓に、「年に二百石こく（一石は約180リットル）ずつ蓄え、五年たったら古いものから使うように」と伝えられてきた。歴代当主はそれを実行し、飢饉の時には“お救い小屋”を建て、粥や薬を提供して、人々の命を救うことに奔走した。蔵の内壁には、天保飢饉の状況や穀物相場の墨書も遺されている。

また、この蔵は、火事に備えて「上屋掛うわやがけ」というつくりになっている。屋根まで漆喰しっくいで塗られてその養生として軽い屋根が乗せられており、壁も土壁養生のための板が張られている。いざ火事となれば屋根を落とし板壁を外し、下部の空気穴は塗り込めて、中のものを守るのであるが、幸い高梨家では大火を出していない。そのため、貴重な史料が現代に伝えられた。